
地獄の姫が見た江戸

影夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄の姫が見た江戸

【Zコード】

Z5563Z

【作者名】

影夜叉

【あらすじ】

京にいた刹那は、高杉に呼ばれ江戸に行つた。
そこで彼女が見たのは……。

第1話 江戸への訪問（前書き）

ずっとやりてみたかった玖月さんとの「ラボー」
許可を得て書きました。

玖月さんのよひで手本へ出来たか、自信がありませんが、どうぞ一
!

第1話 江戸への訪問

「やつと着いた……」

江戸の駅に降り立ち、及川剎那おいがわせつなは呟いた。

「久しぶりだな、江戸エドに来るの」

駅を出て、剎那は紙切れを出して見る。

「……」

『午後6時、コンテナ前』

自身でメモした紙切れを見て、一息つき、駅から歩き出した。

京にいた剎那は、3日前、江戸にいた高杉から連絡を受けた。

『よオ、剎那』

「久しぶりね。晋助さん……」

低めな声で、剎那は携帯越しに答える。

「何か用？」

『あア。おまえ、今京にいんだろ？』

「そうだけど

『ちょっと江戸に来い』

「……江戸に？」

高杉が自分を江戸に呼ぶ理由は、だいたいの予想がつく。

『今度、幕府の要人が集まる宿を襲撃する。おまえの力を借りてエ』

「……構わないわ。そういうことなら」

『そりゃ。なら、3日後の午後6時、港で待つてろ。遣いをやる』

「3日後ね。誰が来るの？」

『黒衣の死に神だ』

それだけを言つと、高杉は携帯を切つた。

『『黒衣の死に神』……』

刹那は咳き、携帯の電源を切る。

「一体、どんな人だの?...」

刹那はこれまでにも、何度か鬼兵隊に協力をしてきた。
だが、タイミングが悪いからなのか、黒衣の死に神に会つたことが

無い。

「あと2時間位か……」

駅と港の中間辺りにある宿に行き、持っていた荷物を広げる。

「早めに着替えるかな

着ていた茜色の着物を脱ぎ、やや丈の短い赤い着物を着る。

「えーっと、紐…」

髪を纏め、赤い紐でボーネテール状にし、白い襟巻きで口元を隠す。

「じゃあ、ちょっと早いけど、行くかな

刀を腰に差し、煉獄姫れんじくひめの出で立ちになると、窓から外に出た。

「…着いた

人目を避ける為、裏通りや遠回りをした。

着いたのは、待ち合わせの15分前頃。

「まだ着てない、か……」

黒衣の死に神の特徴は、2丁の銃を使うこと、女性だということ、そして、その一つ名通り、喪服をあしらつた黒い着物を着ていること。

「晋助さんも、写真位送つてくれれば顔が分かつたのに…」

ぼやきながら、刹那は目を閉じ、波導を見る。

波導は、全ての生き物や物質が放つ、気やオーラのことでは、刹那は生まれつきそれが見える。

(顔までは見えないけど、これで何時着ても……ん?)

遠くから、青白く光る人影が見えた。

(あの人かな?)

波導で相手を吟味していると、思わず息を呑む。

(ここの人、まさか…!?)

そう思つていると、相手はこちらに銃を向け、発砲してきた。

「ぐつ…！」

目を開け、小刀を取り出すと、素早く弾丸を弾いた。

「…！」

キンッ、という高い音が響く。

呼吸を整え、刹那は小刀を構えて相手を見据える。

「流石ですね」

感心したように言つ女の声が聞こえた。

「『死角を知らぬ』、『千里眼を持つ』と呼ばれるに相応しい反応でしたわ」

数メートル程前に、女が立っていた。

暗がりだったが、黒い着物を着て、羽衣を纏っているのが見えた。

「あなたが、黒衣の死に神…ですか？」

小刀を構えたまま、低い声で訊いた。

「鬼兵隊の中ではそう呼ばれていますわ、煉獄姫」

煉獄姫と呼んだ死に神は、微笑みを浮かべて言った。

第2話 開夜の再会

「一ついでですか？」

「何でしょ、つ？」

「何故、銃を下さないの……？」

女は先程からずっと、こちらに銃を向けていた。
その為刹那も、小刀を構え続けていた。

「あなたは、高杉さん……鬼兵隊から来た遣いなんでしょう？」

本人の前や、親しい者との会話では、刹那は下の名前で呼ぶが、初対面の相手や敵には名字で呼ぶようにしている。

「……あなたの実力を、拝見しておこうと思いましたの」

「私の？ それなら、先程見た筈では？」

「弾丸を弾くことが出来る者は、他にもいます。それだけでは、何も言えません」

女が歩き出し、刹那は距離を取ろうと後退る。
その際に、女の顔が見えた。

(「Jの女性……）

そう思つていると、女は発砲してくる。
素早く避け、弾丸はコンテナに命中する。

「煉獄姫の実力、見せて頂きます」

次々に発砲してくる女に、刹那は目を閉じて、波導で見ながら弾丸
をかわし、弾いていく。

「それが噂の『千里眼』ですか？遙か彼方まで見る」との出来る神
眼だと、晋助様は仰っていましたけど」

「（）想像にお任せします。千里眼は、生まれつきなので」

波導で物事を見ている」とから、千里眼で見ていると周りから思わ
れている。

「それより、高杉さんから私のことは聞いていないんですか？鬼兵
隊参謀補佐、せつざわひめか芹沢姫華さん」

「あら、知つていましたの？」

姫華と呼ばれた女は、肩をすくめて笑った。

「てっきり、あなたも私のことを知らないのだと思ってましたわ」

「その口振りからだと、私のことは聞いていな（）ようですね」

「そちらだけ、私の名を知っているのは不公平ですわ。あなたも、
名乗つたら如何です？」

名を訊かれたが、刹那は敢えて沈黙を貫く。

「名乗りたくないのなら、名乗らなくて結構です」

姫華はホルスターから、もう一丁銃を出し、構えた。それを見て刹那も、腰の刀を抜く。

ダンッ！

キンッ！

銃声と金属音が、同時に響いた。

「名を名乗らないとは、随分無礼な方ですか。こんな女性を、晋助様は何故わざわざお呼びしたのか…」

「……」

黙つたまま、刹那は弾丸を弾き、かわしていく。

（行くか…！）

刀を向け、刹那は姫華に向かって行く。

「！？策も無しに、突っ込むつもりですか？」

トリガーを引くと、乾いた音がした。
弾切れだ。

「しまつ…！」

ザン…ツ

姫華は反射的に目を閉じる。が、痛みは感じられず、恐る恐る目を開けた。

「な……!?」

刹那の刀は、背後のコンテナに刺さり、その刃は姫華の顔の数センチ程隣にあつた。

「え……あなた……何故……？」

「私は……あなたを斬るつもりは無いよ」

口調が変わり、姫華は驚いたように刹那を見る。

「……『流加^{るか}』さん」

刹那の発した名に、姫華は目を見開いた。

「あなた、どうしてその名を……!?」

混乱する姫華に、刹那は刀を引き抜き、髪を纏めている紐をほどくと、口元を覆う襟巻きを下げる。

「一緒に、松陽先生と学んでいたでしょ？……改めて名乗ります。私の名は、及川刹那です」

月明かりに、刹那の顔が照らされた。

「刹那……！？え、あなたが、煉獄姫だったの……！？」

「そうだよ。……久しぶりだね、流加さん。あ、本名は姫華さんだっけ」

「……驚かないの？私が女だったってこと。つうん、私が生きていったことに……」

姫華は幼少の頃、峰岸流加みねきじゅうかと言ひ偽名で、男として私塾に通っていた。その後、男どじまかしきれなくなり、病で急死したことになっていた。

「あなたが生きていたことは驚いたよ。でも、女だったってことは知つてた」

「え……！？いつから！？」

「私が12歳の時、風邪をひいて寝込んでいた時に、お見舞いに来てくれたでしょ？その日」

その次の日に、死を装い、姫華は引っ越して行つた。同じ日に刹那は熱が上がり、流加の死を知つたのは、熱が引いた2日後だった。

「そんな前から……」

「嬉しかつた。また、流加さんに会えて……」

微笑む刹那に、姫華は首を振った。

「刹那、流加はもう死んだわ。今は、姫華として生きているの」

刹那は「そう…」と呟き、訊いてみた。

「晋助さんは、あなたのことを知ってるの？」

「知ってるわ。口が滑って、バレちゃったの。あと、銀時と小太郎も、私のことを知っているわ」

「そう…」

「あー…そろそろ、船に案内するわね。私、あなたを迎えて来たから

「あ、うん」

2人は、船に向かって歩いて行つた。

第3話 2人の姫君

姫華に案内され、刹那は鬼兵隊の船に来た。
甲板に行き、高杉と対面する。

「会うのは久々だな、刹那」

「そうだね」

来る途中で髪を纏めたが、襟巻きは下げたままなので、顔が見えて
いる。

「ん? どうした、姫華」

刹那の近くに立つ姫華は、不機嫌そうな顔をしていた。

「どうしたじゃないわ。あなたが、煉獄姫を刹那だと教えてくれな
かつたから、私は彼女を殺しそうになつたのよ」

そう言つと、高杉は小さく笑う。

「そう言つな。刹那は銃じや死なねェよ。相手が誰であろうとな

「最初に撃つたのつて、晋助さんの指示だつたの?」

「…ええ。試しに1発撃つてみる、つて」

と、姫華はあることを思い出し、刹那に訊いた。

「そう言えば、刹那は私のことを、晋助に聞いていたの？」

「聞いてないよ。姫華さんが、流加さんだったってことは」

「驚いただろ？おまえら」

「ヤリと笑う高杉に、刹那は苦笑し、姫華は呆れ顔をする。

「刹那は途中で私だと気付いてくれたけど、口調だけだと全く分からなかつたわ」

「私は、公私混同はしない主義だからね。煉獄姫の時は、声を低くしてゐる」

「どうりで氣付けなかつた筈だわ……」

ため息をついていると、後ろから1人の男がやつて来る。

「姫華！」

「万斎！」
呼ばれてすぐ、姫華は嬉しそうに振り返る。

万斎は姫華の近くに行くと、そばにいる刹那に気付いた。

「！久しいで！」「わな、煉獄姫」

「お久しぶりです。河上さん」

低めな声で、刹那は挨拶した。

「あら、彼女のことを知っているの？」

「任務で数回一緒になつただけで、じかる。それ以外は無いー。」

意外そうに訊く姫華に、万斎は慌てて言つた。

「良かった。浮氣相手が、彼女かと思つたわ」

「だから、あれは誤解で……。」

2人のやり取りを見て、刹那はクスクスと笑つた。

「河上さんの言つていた女性は、あなたのことだったのね」

「ちよつ……一万斎！あなた、彼女に向て言つたの！？」

「と、特にね……。拙者には、愛する女がいる……」

「わつ……。」

「その位にしておけ」

高杉が言つと、視線が集まつた。

「今夜の襲撃は、姫華と刹那にやらせる

「姫華と煉獄姫を……？」

「その為に、京から刹那を呼んだ」

そう、江戸に来た理由は、幕府の要人が集まる宿を襲撃する為で、遊びに来た訳ではない。

「なら、拙者も一緒に」

「姫華と刹那に、つて言つただろ？万斎、おまえは残れ」

「何故、万斎は一緒ではありませんの？」

姫華は不服そうに言い、口を尖らせる。

「刹那は状況に応じて、刀を使い分ける。小刀のみ、刀のみ、もしくは、その2つを使った二刀流にしたりとな……」

「確かにそうであるが……」

「それともう一つ」

「私の……千里眼のことですか」

田を細めて、刹那は言葉の続きを口にする。

高杉は、刹那の青緑色の瞳を見る。

「千里眼は、あくまで保険だ。俺は、おまえの腕を見込んで呼んだ。勘違いすんな」

「……そうですか

高杉が自分の持つ、波導を見る力が田当てで、いつも呼ぶ訳ではないと分かっている。

「では、そろそろ行きましょうか？煉獄姫」

「ええ。ようしけお願いします、死に神さん」

自分達の関係が他の幹部達に気付かれないようになると、2人は船に着く間に、お互いの呼び方を話し合って決めた。

「どうしても、この者と一緒に行くでござるか？」

万斎は、まだ諦めきれないようだ。

「晋助様の命令だもの。さあさと終わらせて、すぐ戻つて来るから待つてて」

姫華は名残惜しそうにしながら、船から降りて行く。

「刹那

一緒に這いついた時、高杉に呼び止められた。

「なあに？」

近くに行くと、高杉は小さな箱を投げて寄越した。

「これ……

「1日早いけどな」

それが何の意味か、すぐに分かった。
刹那は微笑み、箱を懐にしまう。

「覚えててくれたんだね」

「当たりめでたさだろ」

「ありがと。…行つて来るね」

下げていた襟巻きを口元に上げ、刹那は姫華の後を追つた。
凍てつくような田つきになつて。

第4話 襲撃と戦闘

刹那は姫華と、姫華の数人の部下と一緒に、目的地の宿にやつて来た。

「私は、斬り掛かつて来る者を全て斬り伏せます」

「なら私は、遠方から撃ち抜いていく…。で、どうでしょう?」

姫華の部下達を、指定した場所に配置した後、2人は、それぞれの役割を決める。

「…では、それでお願いします」

口元を隠し、あまり表情が見えないが、刹那は頷いて答えた。

「何も…つ…！」

発した言葉は最後まで出ず、刹那に着られた男は倒れた。

「ぐあつ…！」

「ぎゃあつ…！」

銃声、悲鳴、奇声、様々な音が飛び交う。

「流石ね、煉獄姫」

刀を振るつ刹那の姿を見て、姫華は咳く。

その間に姫華は、自身に近付く男達を撃ち抜いていった。

「片付いた？」

しばらくして、幾らか返り血を浴びた刹那は、姫華に訊いた。

「ええ。呆氣なかつたわ」

銃を下ろす姫華に、刹那は辺りを見てから咳く。

「あなたの部下達は？」

「一緒に片付けたわ」

「……そう

それを訊いた刹那は、床に転がる姫華の部下に目をやつた。

「酷い？」

「ううん。私も、似たようなことはするから…」

尤も、刹那の場合は、裏切りやスペイなどを見つけた時にしかしないが。

「終わったことだし、早く引き上げましょ！」

「待つて」

歩き出せりとする姫華に、刹那は呼び止めた。

「どうしたの？」

「すぐには帰れそうにないわ。……囮まれてる」

声を潜める刹那に、姫華は田だけで辺りを見る。
……確かに、囮まれている。

「真選組？」

「恐らく。しかも、一度京で逢つた方がいるわ」

田を閉じた刹那には、数多くいる人物の中で、見知った波導を見つけていた。

「京で逢つた方…？」

姫華は復唱し、ある女性を思い浮かべた。

「…来るー。」

咳き、田を開けた瞬間に、部屋に真選組の隊員達がなだれ込んで来る。

「あなたのその千里眼、便利で羨ましいわ

隊士達を撃ちながら、姫華は咳いた。

「私は生まれつきだけど、修行をすれば、身に付くらしいわ。やり方は知らないけど」

小声で答え、刹那は小刀も出し、一刀流で隊士に斬り掛かって行く。

「驚いたわ。まさかあなただけでなく、煉獄姫にも会うことになるなんて」

ハスキーな女の声が聞こえ、姫華は振り返った。
そこには、真選組の隊服を着た女性がいた。

「」
「んばんは。やはり、あなたでしたのね。近藤操」

姫華は銃を向けて挨拶をする。

「」
「んばんは、姫華」

操も刀を向けて、同じように挨拶した。

「一つ訊いていい？」

「何でしちゃう？」

「鬼兵隊はいつから、煉獄姫を仲間に引き入れたの？」

その問いに、姫華は僅かに笑う。

「彼女は、鬼兵隊の一員ではありませんわ。頼りになる協力者です
が」

「そつなの？なら、安心……だわ！」

操は、後ろに飛び、姫華は透かさず発砲した。

「彼女の力は、京で一度見たことがあるけど、かなり厄介だったわ」
先程、刹那が言っていた人物は、やはり操のことだったか、と姫華
は思った。

「煉獄姫に、お逢いしたことがありますの？」

「ええ。名前も顔も教えてくれなかつたけどね」

煉獄姫という名は知られていても、顔や本名は知られていない為、
刹那の顔を見ても、煉獄姫だと分からない。

「あなたには教えてくれたの？自分の素顔」

「さあ？どうでしょう。気になるのでしたら、『自分で訊いてみて
はいかがでしょう？』

刹那を一警した後、姫華は再び発砲し、操は弾丸を弾いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5563z/>

地獄の姫が見た江戸

2011年12月25日20時52分発行